

## エッセイ特集2 ヴィクトリア朝研究の新しい視点

### 妖精写真奔走記

浜野 志保

私はこれまで、視覚文化史および周縁科学文化史の観点から、主に心霊写真をはじめとするパラノーマル写真についての研究を行ってきた。2015年には、その成果を著書『写真のボーダーランドX線・心霊写真・念写』（青弓社）にまとめた。現在は、研究対象となる地域やテーマを少し変更し、19世紀末から戦間期にかけてドイツで流行したダウジングと筆跡学に関する著書を準備中である。

研究テーマが超常現象に関するものであることから、研究活動を通じて、いくつかの奇妙な出来事にも遭遇してきた。その内のいずれかの話（たとえば、古い心霊写真を売りに来た美術商の話や、新宿でゴム人間の写真を撮影した学生の話、飛騨高山の山奥にある念写資料館の話、等々）を書くべきかとも思ったが、『ヴィクトリア朝文化研究』の埋め草となる本稿では、「コティングリー妖精事件」にまつわる新資料の話について書こうと思う。

「コティングリー妖精事件」そのものは、ジョージ五世の時代に起きた出来事であるが、ヴィクトリア朝を代表する人気小説家の一人であるアーサー・コナン・ドイル（1859-1930）が深く関与していたことで広く知られている。また、日本国内にいながらまったくの偶然によって新資料と出会ったことは、研究者としては貴重な体験であり、自分自身のためにも、まだ記憶が新しいうちに記録を残しておきたい。

#### 1. 「コティングリー妖精事件」

資料調査の顛末について述べる前に、そもそも「コティングリー妖精事件」

とは何だったのか、その概略を紹介しておこう。

1917年、ヨークシャー州のコティングリーという村で、エルシー・ライト(1901-1988)とフランシス・グリフィス(1907-1986)という二人の従姉妹たちが、奇妙な写真を撮影した。7月に撮影された1枚目の写真には、花冠をかぶったフランシスの前で踊る妖精たちの姿が写っていた。写真はモノクロだが、少女たちの証言によると、妖精たちの色は「とても淡いピンク、グリーン、ラヴェンダー、モーヴで、羽の部分が一番くっきりとしていて、手足や衣はほとんど色が薄れて真っ白」だった。<sup>1</sup>9月に撮影された2枚目の写真には、草むらに座ったエルシーの膝に飛び乗ろうとしている地の精ノームの姿が写っていた。このノームは「黒いタイツ、赤茶色のジャージ、真っ赤なとんがり帽子」という格好をしており、「もこもこと柔らかく色の薄い」羽は、「妖精にくらべて蛾のよう」だった。<sup>2</sup>

これらの写真に大きな関心を寄せたのが、神智学者エドワード・L・ガードナー(1869-1969)である。神智学(theosophy)とは、ロシア出身のヘレナ・P・ブラヴァツキー(1831-91)らが創設した「神智学協会」(The Theosophical Society)の提唱する思想で、西洋と東洋の宗教対立を超克することにより、古代に存在していた根源的な叡智の回復を目指すものである。1907年に神智学協会に入ったガードナーは、1917年当時には協会における中心メンバーの一人となっており、英国各地で神智学についての講演を精力的に行っていた。ガードナーは少女たちに新品のカメラを贈り、新たな妖精写真を撮影するよう依頼した。

3年後の1920年5月、妖精写真の噂は、ついに作家アーサー・コナン・ドイルの耳にまで届く。当時のドイルは、創作よりも心霊主義の普及活動にのめりこんでおり、1918年に設立された「超常写真研究会」(The Society for the Study of Supernormal Pictures)では副会長も務めていた。さらに、彼の伯父リチャード・ドイル(1824-83)は数々の妖精画で知られる人気画家であり、売れない画家だった父チャールズ・アルタモント・ドイル(1832-93)も、妖精たちを好んで描いていた。

ガードナーと接触して詳しい話を聞いたドイルは、同年末に発行された『ストランド・マガジン』(The Strand Magazine)クリスマス号に、「妖精の出現」と題した記事を寄稿した。この記事には2枚の妖精写真が掲載されて

いたが、同誌の発売より少し前の1920年8月には、ガードナーから贈られたカメラを使って、さらに3枚の妖精写真(飛び上がる妖精、花束を差しだす妖精、妖精たちの日光浴用ベッド)が撮影されていた。1922年、ドイルは合計5枚の妖精写真と、『ストランド・マガジン』に掲載した記事、それに対する反響、現地調査の報告などを一冊にまとめ、『妖精の出現』(*The Coming of the Fairies*)として出版した。

この事件の真相が当事者によって明かされたのは、ドイルやガードナーが亡くなった後のことである。1981年、当事者の一人であるフランシスは、妖精事件についての調査を実施していた社会学者ジョー・クーパー(1924-2011)に対し、写真の妖精は紙に描いたイラストを切り抜いたものであったことを打ち明けた。翌1982年、クーパーは雑誌『アンエクスプレインド』(*The Unexplained: Mysteries of Mind, Space and Time*)に「コティングリー——ついに真相が」(*Cottingley: At Last the Truth*)という記事を寄稿し、翌1983年には、ロンドンの新聞『タイムズ』(*The Times*)4月9日号に、写真は捏造だったと認めるフランシスの告白が掲載された。

かくして世間を騒がせた妖精写真は、少女たちの手によるフェイクであったことが明らかとなった。<sup>3</sup> ガードナーやドイルの期待に反して、妖精の存在を示す証拠にはならなかったわけだが、これらの写真の写真史上の意義や面白さは、「リアル/フェイク」という単純な二分法とは異なるところに存在している。詳細については拙著『写真のボーダーランド』で述べたとおりであるが、19世紀前半に誕生した写真というメディアは、そもそも黎明期から、大量のフェイク画像を生み出していた。画家出身の写真家たちは、手の込んだ合成写真によって写真の芸術性を高めようと苦心し、家族アルバムの作製をまかされた主婦たちは、自作のイラストの中に家族のポートレートを貼りつけたコラージュを作った。要するに、Photoshopの普及よりも前から、合成写真は決して邪道な楽しみではなく、私たちが写真というメディアと付き合う様々な方法の内のひとつだったのである。

## 2. 新資料との出会い

さて、既に拙著で一章を割いて論じ、自分の中では一区切りがついたつ

もりでいた「コティングリー妖精事件」が、私の研究生生活の中に再び飛び込んできたのは、まったくの偶然によるものだった。

2016年3月26日、田中千恵子『「フランケンシュタイン」とヘルメス思想——自然魔術・崇高・ゴシック』（水声社）の刊行を記念して、著者である田中氏と高山宏・大妻女子大学教授との対談イベント「はじめて語られる異貌のフランケンシュタイン像」が下北沢にある書店「本屋B&B」にて開催された。高山教授は、田中氏の博士論文の副査であり、私自身の大学院（今はなき東京都立大学）での指導教官でもあるので、私も観客の一人としてこのイベントに参加した。

盛況の内にイベントが終わり、店を出たところで、見知らぬ一人の青年から『写真のボーダーランド』の浜野先生ですね」と声をかけられた。青年の傍らに停められた車椅子には、にこやかな微笑を浮かべつつも、どこか常人とは異なる雰囲気をも漂わせた女性が座っていた。青年は、車椅子の女性が井村君江氏であり、自分は井村氏のアシスタントであることを私に告げた後、次のように申し出た。

「井村先生が『コティングリー妖精写真』に関する未公開資料を所有されているのですが、心霊写真等の特殊な物品が含まれており、なかなか手をつけられずにいます。専門家として、調査にご協力いただけませんか」

井村氏については、今さら私が紹介する必要もないだろう。日本におけるケルト・ファンタジー文学研究の泰斗であり、学術研究としての「妖精学」のパイオニアである。宇都宮在住の井村氏とアシスタントの矢田部健史氏は、この日、純粋に田中氏の出版記念イベントに参加するために下北沢を訪れていた。それまで二人は私の顔を知らなかったが、イベント中、客席に私の姿を見つけた高山教授が「浜野君」と呼びかけたことで、矢田部氏が私の存在に気が付いたのだった。「未公開資料」という言葉に大きく心を動かされた私は、帰宅後すぐに矢田部氏と連絡をとり、双方の準備が整い次第、資料の寄託先である「うつのみや妖精ミュージアム」で現物を見せてもらうことになった。

大学が夏休みに入った8月5日、ようやく資料調査の準備が整い、井村氏が名誉館長を務める「うつのみや妖精ミュージアム」を訪ねた。井村氏

の月例講演会の後、ミュージアムに隣接する作業スペースを借りて、私が参加する最初の資料調査が実施された。この日の調査には、私、井村氏、矢田部氏、うつのみや妖精ミュージアム学芸員(当時)の青柳柊子氏、妖精研究者の井沼香保里氏(現・一橋大学大学院博士課程)の5名が参加しており、翌9月以降の調査には、フェアリー協会の吉田孝一氏も加わった。

資料はすべて中性紙に包まれた状態で段ボール箱に入っており、それぞれの資料には、整理番号と簡単な見出しが添えられていた。資料の点数は決して多いわけではなく、保存状態も予想していたよりは悪くなかったが、個々の資料の写真を撮影しながら他の参加者たちと話をする内に、ひょっとしたらこの調査はかなり難航するのではないか……という悪い予感が頭をもたげはじめた。

最大の問題のひとつは、資料取得からかなりの年月が経過していたため、取得時の状況に不明な点が多すぎることだった。「神智学者ガードナーの遺品」としてオークションで落札されたものであることは間違いなかったが、オークションの運営会社や開催時期が不明であり、カタログ等の資料も残っていなかった。また、オークションに参加して物品を落札したのは、井村氏から仲介を依頼されたロンドンの美術商であり、井村氏自身ではなかった。クリスティーズ主催のオークションだった可能性が高いとのことで、クリスティーズの日本支社に電話で問い合わせたが、過去のオークションに関する情報については、落札者自身にしか開示できないとのことだった。

さらに、資料の内容についての目録がないため、資料相互の関係についても一から探る必要があった。手書きのメモや写真、ガラス乾板、関係者の名詞など、かなり雑多なものが含まれていたが、これらの物品の間に「ガードナーの遺品」という以上の共通項があるのかどうか、この時点では見当もつかなかった。人物の写ったスナップ写真類についても、メモが付記されているものは少なく、エルシーとフランスス以外の人物を特定することは困難に思われた。

くわえて、調査に必要なマンパワーが圧倒的に不足していた。チーム全体の人手不足に加えて、私個人も自分の技量不足を痛感した。文化史研究を看板に掲げてはいるものの、これまでに扱った一次資料は印刷されたり

タイプされたりしたものばかりで、手書きの書簡やメモを読んだ経験はほとんどなかった。通常の単語であれば、前後の文脈からある程度は推測できるが、人名等の固有名詞に関しては、まるで歯が立たなさそうな箇所も多かった。

初回の調査以後は、上記のメンバーが毎月一回程度のペースで宇都宮に集まりつつ、撮影した資料の画像やメーリングリストなどを活用して調査を進めたが、しばらくの間、進展と呼べるほどの進展は見られなかった。

### 3. 調査の進展

遅々として進まない調査に転機が訪れたのは、私が調査に関わりはじめてから約半年後のことである。

2017年3月7～8日、大阪・歴史民族博物館で神智学に関する国際カンファレンス“Modernity and Esoteric Networks: Theosophy, Arts, Literature and Politics”が開催された。私も、以前に別の研究会でお会いした吉永進一・舞鶴工業高等専門学校教授からお声掛けいただき、発表の機会を与えられていた。私が登壇したのは、神秘思想研究の大御所ジョスリン・ゴドウィン氏がコメンテーターを務めるテーブル“Literature and Esotericism”で、私以外の発表者は、先述の田中千恵子氏と、橋本順光・大阪大学教授だった。カンファレンス参加者の中には、英国の近代神秘思想に詳しく、「コティングリー妖精事件」についての学術論文を刊行されている赤井敏夫・神戸学院大学教授の名前もあった。

私の口頭発表“A Bag Full of Fairies: Edward L. Gardner, Arthur Conan Doyle, and the Cottingley Fairies”は、調査中の資料の紹介を中心とするものだった。調査があまり進んでいない段階での発表である以上、研究発表としてのクオリティは決して高いものではなかったが、多くの識者が集う場所で中間報告をすることで、調査に役立ちそうな情報を得たいと考えていた。この目論見は、期待していた以上の成功をおさめた。

音楽史家のレイチェル・カウギル氏(ハダースフィールド大学)からは、彼女の同僚である英文学者メリック・バロー氏が「コティングリー妖精写真」についての著書を準備中であり、きっと力になってくれるはずだと教えら

れた。後日、カウギル氏からの紹介により、バロー氏とのメールの遣り取りが始まった。バロー氏は、コティングリー関連の資料を多数所有しているリーズ大学図書館にもたびたび足を運んでおり、同図書館所蔵の一次資料については、特に貴重な情報や意見を惜しみなく提供していただいた。

美術史家のマルコ・パシ氏(アムステルダム大学)からは、イギリスで発行されている電子ジャーナル『サイパイオニア』(*Psypioneer*)に調査協力を依頼してはどうかとのアドバイスを受けた。助言に従って同ジャーナルの編集部にもメールで問い合わせたところ、創刊者であるレスリー・プライス氏から返信が送られてきた(尚、同ジャーナルは2016年12月で休刊)。レスリー・プライス氏は、英国の神秘思想の生き字引のような人物で、当時は英国神智学協会のアーキビストを務めていた。プライス氏には、神智学協会、英国心霊現象研究協会(The Society for Psychical Research)、心霊研究カレッジ(The College of Psychic Studies)などのアーカイブから、有益な情報をたびたび送っていただいた。

それから数ヶ月の内に、さらなる進展があった。長らく音信不通だったロンドン在住の美術商M氏から、ようやく井村氏に対して返信があり、オークションにおける代理人が彼であったこと、資料を落札したオークションはクリスティーズではなくボナムズ(現ボナム&ブルックス)のものであったことが判明したのである。M氏からは、当時のオークションカタログのコピーや、井村氏からM氏への依頼内容に関する資料なども提供され、資料入手時の状況がほぼ明らかになった。

この時期になると、調査自体にも進展が見られるようになっていた。手書き資料などを地道に解読した結果、資料の一部(報告書および写真)は、コティングリー妖精写真の影響を受け、グラスゴーで撮影された妖精写真についての現地調査に関わるものであることが分かった。また、報告書に署名が記されている“Adelaide”とは、後にガードナーの二番目の妻となるイライザ・アデレード・ドレイパー(1894-1960)のことであることがほぼ確定した。当時、アデレードは神智学協会の若手会員であり、ガードナーからの指示を受けて、グラスゴーでの現地調査に携わったと思われる。

アデレード以外にも、資料に登場する人々の正体が徐々に明らかになってきた。彼らの一部は、心霊主義に関連するドイルの著作や、心霊主義

系の媒体に寄稿した記事にも名前が登場していた。また、スナップ写真に写った人物の特定に際しては、フランシス・グリフィスの娘であるクリスティン・リンチ氏の協力を仰いだ。リンチ氏は、フランシスによる回想録 *Reflections on the Cottingley Fairies* を2009年に刊行しており、同書のPR用に公開されていたWebサイトから連絡を取ることができた。

#### 4. 資料の公開へ

調査が進むにつれ、宇都宮での月例ミーティングでの話題の中心は、新資料をどのように公開するかという話へとシフトしていった。少女たちが最初に妖精写真を撮影したのは1917年のことであり、ちょうど百年目となる2017年には、コティングリーやロンドンでも多数の関連イベントが開かれていた。遠く離れた日本においても、妖精写真に関する新資料を公開するには絶好のタイミングだった。

資料の寄託先であるうつのみや妖精ミュージアムでは、8月12日から10月29日にかけて、特別企画展「コティングリー妖精事件」が開催されることが既に決定していた。ただし、企画展示が同時に開催されるため、常設展示室の一角を間借りする形となり、展示スペース等にはかなりの制約があった。予算はほぼゼロに等しいものの、どこか別の場所でも展示したいと考えた私は、不躰であることを承知の上で、個人的な伝を頼ることにした。

まず、以前に研究会(ヴィジュアル・スタディーズ・ネットワーク)でお目にかかった名古屋大学の藤木秀朗教授に、名古屋大学構内にある「プロジェクト・ギャラリー-clas」の使用について相談した。かなり唐突かつ無茶なお願いであったにも関わらず、ギャラリーの運営に携わっている栗田秀法教授を紹介していただき、2018年1月上旬に「コティングリー妖精写真と神智学者ガードナー」展の開催が実現した。この展示については、1月15日の朝日新聞夕刊に詳細な紹介記事が掲載され、最終的には予想をはるかに上回る来場者数となった。

さらに、東京都写真美術館の学芸員であり、私と同じく表象文化論学会の会員である遠藤みゆき氏にも、同館での展覧会の開催を相談した。遠藤

氏からは、単独での展示は難しいものの、「第10回恵比寿映像祭」の一企画としてならば可能かもしれないとの返事を受け取った。相談した時点で未公表だったが、「第10回恵比寿映像祭」のテーマは「インヴィジブル」であり、妖精写真はまさにうってつけの素材だった。企画は無事に採用され、2月9日から25日の2週間にわたる展示「コティングリー妖精写真および関連資料」および井村氏と私のギャラリートークが実現した。また、遠藤氏をはじめとする同館のスタッフの方々からは、展示に際して具体的なアドバイスを受けることができた。

東京都写真美術館での展示には、さらに嬉しい偶然が重なった。「第10回恵比寿映像祭」の開幕翌日にあたる2月10日から、Jホラーを代表する映画作家である高橋洋監督の映画『霊的ポリシェヴィキ』の公開がスタートしたのである。霊界との交信をテーマにした『霊的ポリシェヴィキ』の作中では、「コティングリー妖精写真」の一枚が重要なアイテムとして使用されており、同作の公式Twitterアカウントには、写美での展示情報や、監督やスタッフが写美を訪れた際の話などが書き込まれていた。さらに、京都の映画館「出町座」での同作上映（4月21日～5月4日）の際には、劇場からの提案により、併設のギャラリーにて「妖精事件と神智学者ガードナー」展が同時開催された。

これらの展覧会の企画・開催と並行して、新資料の一覧と「コティングリー妖精事件」についての論考をまとめた日英併記の書籍『コティングリー妖精事件——百年目の新事実（仮題）』の刊行準備も進められてきた。版元は、井村氏の著作をはじめ、妖精や妖怪などをテーマとした本を数多く手がけてきた大阪の「レベル」に決定した。同書は既に編集作業の段階に入っており、2018年内に刊行予定である。

## おわりに

以上、私が「コティングリー妖精事件」に関する新資料の調査に携わった経緯と、その後のさまざまな展開について記してきた。こうしてまとめてみると、調査開始から資料公開へと至る過程において、幸運な偶然がいくつも重なっていたこと、驚くほど多くの人に助けられてきたことが、改

めて実感される。それと同時に、自分の図々しさにも愕然とするが、少なくとも本件に関しては、その図々しさがプラスに働いたように思われる。

足掛け2年にわたって関わってきた資料の調査と公開も、論集の刊行をもって一区切りとなる見込みである。今後の研究生活においても、今回のような幸運な偶然や出会いが待っていることを願いつつ、筆を擱きたい。

#### 注

- 1 アーサー・コナン・ドイル、井村君江訳・解説、『妖精の出現——コティングリー妖精事件』（東京：あんず堂、1998年）p. 20.
- 2 前掲書、p. 30.
- 3 ただしフランシスは、5枚目の写真についてはフェイクであることを認めていない。この点については、近刊予定の『コティングリー妖精事件——百年目の新事実』（レベル）所収のフランシスの回想録でも言及されている。

——千葉工業大学准教授